あの頃の自分の事

倉井　香矛哉

誰にも、卒業できない恋がある。そんな昔の歌の一節を知ったのは、僕自身の高校を卒業する頃だったろうか（渡辺美里「卒業」、一九九一年四月）。誰もが――とまでは云えないかもしれないが、それぞれの卒業を迎えた多くの人たちが――人生の通過儀礼として思い描くという、上京という物語について、本稿の書き出しとして考えてみたい。そのような固定化された言説は、近代以降に創出された幻想に外ならない、と否定することはたやすい。しかしながら、これまでに多くの人々が大学進学に伴う出立と別離にささやかな希望と不安を抱き、また、それぞれの思い出とともに、数々の文学作品や流行歌が生まれたことは事実であろう。本稿では、大学と上京物語に関係する言説を背景としながら、そのような類型とは別の分岐を経由した僕自身の経験を省察することを通じて、今日の大学をめぐるいろいろの問題の一端について言及することにしたい。

なお、冒頭にあたって、以下のように本稿の概要を示しておきたい。そもそもの大前提として、芥川龍之介の小説に本稿とまったく同じタイトルのものを見付けることができる。これは、もちろん執筆者の意図に依る。すなわち、東京育ちで、東京帝国大学の学生だった頃の芥川の筆致と対比させることによって、北九州市で育った幼年期から、中学・高校時代までのこと、福岡市内の大学へ遠距離通学していた頃のこと、さらに、大学院進学で上京、――あるいは、東下り――したことを振り返りながら、自分にとっての大学とはどういう場所だったのか、ということについて書いていくことにしたい。また、それらの記述の背景として、この国の首都圏と地方に遍在する大学が抱えているさまざまな問題や、地方の国立／私立大学から首都圏の大学院へ進学することのメリットとデメリットについても触れることになるだろう。同時にまた、自己自身の抱え込んでいた周囲との対人的なコミュニケーションの不全と云う、ごく小さな問題についても。……とはいえ、今回は研究論文ではないため、専門家向けのおカタい言葉づかいは極力排しつつ、できるかぎり気楽に読めるような筆致を心がけたつもりである。

僕は、北九州市で生まれ育った。その幼年期の憧憬は、大学や学生街と密接な関係を有していたといってよい。実家の周囲には、福原学園の九州共立大学、九州女子大学、それに加えて産業医科大学の各キャンパスが点在していた。さらに、二〇〇一（平成一三）年以降になると、北九州学術研究都市を構成する国公私立大学（北九州市立大学、九州工業大学、早稲田大学、福岡大学）をはじめ、全国有数の研究機関や企業を擁する産学官連携の拠点となる都市空間が整備されていくことになる。僕の通った幼稚園は福原学園の管轄であり（道徳的規範の強い私立幼稚園だったため、かならずしも馴染めなかった）、また、三歳の頃には、産業医科大学の小児病棟に入院した記憶がある。そして、実家の周辺には、浅川学園台、学園大通り、医生ヶ丘といった地名がつけられていた。つまり、僕は文字通りの大学生の街で育ったのである。

小学生のころから、同級生には真面目な生徒が多かったように記憶している（当時は友人の親の職業など気にしたこともなかったが、ひょっとすると大学職員・医療関係者の御子息も多かったのではないか）。そのような生育環境も手伝ってのことか、僕自身、小さいころから真面目さや勤勉さをどこか美徳のように考えていた。寡黙な生徒ではあったが、生き物が好きで、小学一年生のときに初めて学校図書館で借りた本は、アオウミガメの図鑑だった。その後、生き物に関係する図鑑はほとんど読破したし、将来は何らかのかたちで生物に関係する職業に就きたいとも思っていた。もっとも、クラスの文集に書いていた将来の夢は「映画をつくる」ことだったから、あくまでも漠然とした希望だったのだと思う。札幌を舞台とする映画に登場した北海道大学のポプラ並木に憧れたり、或いは、古い伝記を読んだ影響から、「将来は東京帝国大学に入りたい」などと宣言したりする（書物から得た知識がほとんどであったから、もはや帝国大学がこの世に存在しないという事実を知らなかった）、空想に耽りがちの、無邪気な子どもだった。

その後、生物に関係する職業に就くことは難しいと考えるようになったのは、中学二年生の頃だった。具体的に云えば、午前中の理科の時間に解剖の映像を観ることになって、昼食の弁当がまったく喉を通らず、自分には無理だと痛感したのである。以後、古代の化石を扱う古生物学や、天体望遠鏡とスーパーコンピュータを駆使して宇宙のさまざまな現象を観測する天文学を志すようになった。ただ、この頃も漠然と映画づくりへの